

『その名はインマヌエル』 井上隆晶牧師
イザヤ書9章1～6節、マタイによる福音書1章18～24節

①【ヨセフの苦悩】

イエス様の降誕物語はマタイとルカだけが書いています。ルカ福音書には天使ガブリエルによる「マリアへの受胎告知」が書かれていますが、マタイ福音書では夢の中で現れた天使による「ヨセフへの受胎告知」が書かれています。

「母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。」(18～20節)
ここで「夫ヨセフは」と書かれているのは、当時のイスラエルの習慣では一緒になる前の婚約中であっても法的には「夫婦」とみなされていたからです。ヨセフは正しい人であったとあります。聖書で「正しい人」というのは神の戒めを守る人のことです。ヨセフは神を信じる人でした。そんなヨセフに婚約者であるマリアが聖霊によって身ごもったことが知らされます。そこでヨセフは表ざたにしないでひそかに縁を切ろうと決心しました。どうしてヨセフはこのように決心をしたのでしょうか。信仰があるなら、聖霊による受胎であると信じ、マリアを保護し、守るべきでしょう。でも聖霊によって身ごもった証拠はどこにあるのでしょうか。日本の昔話の「かぐや姫」のように、光る竹から生まれれば、この世のものではないと分かるでしょう。でもマリアさんのお腹は光っていません。マリアの言葉だけで判断しなければならないのです。彼女が嘘を言っているとすれば、神の正しさに添ってマリアは処罰されなければなりません。でもヨセフはマリアがそんな人間ではないことを知っていました。悩んだあげく彼が出した答えは「表ざたにしないで、ひそかに縁を切る」というものでした。表ざたにしないという事は、せっかくの神の業を隠し、神の業と関わらないようにするという事です。ヨセフは現実と信仰の間で板挟み状態にいるのです。確信がないのです。パウロは「確信に基づいていないことは、すべて罪なのです。」(ローマ14:23)と書いています。マリアの受胎だけでなく、現代でも聖霊(神)の働きか、人間の働きかをどうやって見分ければ良いのでしょうか？

②【神の言葉が私たちに確信を与えてくれる】

離縁の決心をしたヨセフに、その夜、天使が夢に現れてこう言いました。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」(20～21節)

夢というのは当時「神のお告げ」の手段でした。この後、いつもヨセフには夢の中で神の言葉は告げられます。天使はヨセフに「恐れず妻マリアを迎え入れなさい

い」といいました。ヨセフが恐れていたことが分かります。信仰というのは不信仰との闘いであって、恐れを感じるものです。ヨセフは「眠りから覚めると、主の天使が命じたとおりに、妻を迎え入れ」(24 節) ました。「眠る」というのは聖書では不信仰の象徴として使われる言葉であり、「目を覚ましていなさい」というのは神の言葉を信じなさいという意味です。だからヨセフは迷いという眠りから覚め、信仰に目覚めたということです。ヨセフに信仰を与えたものは、神の言葉でした。ヨセフは神の言葉によって、自分の判断をひっくり返し、勇気をもって前に歩き始めたのです。そこには恐れがふっきたようにも感じられます。

●ネヘミヤ記の中に、ペルシャから帰って来た民は、エズラの読み上げる律法の書(モーセ五書)を6時間、聞いたという驚くべき記事が書かれています。「彼は…夜明けから正午までそれを読み上げた。民は皆、その律法の書に耳を傾けた。」(ネヘミヤ8:3) しかも朗読の時も、その後の説明の時も、民は立ったまま聞いたというのです。(5、7 節) そんなことが出来るのかと思うかもしれませんが、正教会では今でも立ったままで礼拝し、長い時は5時間立ったままの時もあるそうです。ここから聖書を朗読する時には「立ち上がる」という習慣が生まれたのでしょう。今でも朗読の時は「謹んで立て」と輔祭は言います。ネヘミヤ記はそれを七日間続けたと言います。これが「聖会」のルーツでしょう。その結果、民は一日の内、四分の一を聖書朗読をして過ごし、四分の一は罪を告白して祈ったと言うのです。すなわち変わってしまったということです。

『無名の巡礼者』という本があります。その中にアルコール依存の部隊長の話が出てきます。彼は酒でたびたび失敗をしました。落ち込んでいる時に、一人の修道士さんが尋ねて来て「聖書を読みなさい」と言って福音書を与えこう言います。「福音書というものは、神様ご自身のみことばを含むものですから、人間を聖にする力をもっています。ですから、ちょっと読んでみて解らないとしても、決して心配なさるには及びません。どうぞ、わからなければわからないままに、とにかく熱心に読み続けてください。ある聖人は、たとえあなたは神のみことばがわからなくても、悪霊たちは、あなたの読んだことが良く解って戦慄すると言っています。…また聖ヨハネ・クリュソストモスは、暗闇の霊は、聖福音書が納められている櫃にさえ戦慄して、決してそれを犯そうとはしない、と言っておられます。」彼は言われるまま聖書を読むと、やがて酒を飲みたいという欲がなくなって来て、最後には酒が嫌いになってしまいました。これは実話です。

神の言葉には、人間を聖め、信仰を与え、変えてしまう力があります。これ以降、どんな時もヨセフは神の言葉(お告げ)に従う人となりました。ヨセフは正しい人でしたが、その正しさを捨てて、神のみを正しい方としてその言葉を選ぶ生き方に変わったのです。私はクリスチャンというのは「自分の正しさ」を捨てなければいけないと思っています。正しい方はただ一人、キリストだけです。自分の

判断ではなく、主イエス様が言われた言葉を判断基準にしなければなりません。頭の回路をそのように造り変えるのです。価値観の転換です。頭の回路は同じ思考の繰り返しによって出来上がります。聖書を繰り返し朗読し、暗記するのです。聖書を読みましょう。

③【神はわれわれと共におられる】

マタイはこの出来事が、イザヤの預言書に書かれている「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。この名は、神は我々と共におられるという意味である。」(イザヤ 7:14) という預言がイエス様によって実現したのだと解釈しました。その昔、エルサレムの町が敵に包囲された時、アハズ王に預言者イザヤは「神が必ずエルサレムを守るから安心なさい。不安なら何かしるしを求めなさい。」と言いました。しかしアハズはこんな状況なのに神など信じられるかといってしるしを求めませんでした。そんな不信仰なアハズに対し、神は一方的にしるしを与えたのです。それが「おとめが身ごもって男の子を産む」というものでした。同じようにマリアが身ごもってイエス様を産むことが、神がこの世界を守り、救うこととしるしだとマタイは言うのです。クリスマスの出来事は、私たち人間の不信仰、罪深さにも関わらず、神は人と共にいてくださる出来事なのです。

●一人の母親が八歳の娘を白血病で失いました。ある夜、消灯時間が過ぎても寝付けないその子のために、若い看護師が本を読んでやりました。やがて静かな寝息を立て始めたその子の横で、なおも看護師は30分近くベッドサイドにいたそうです。子供の死後、母親はこう言いました。「あの子が、その夜、ふと、うす眼を開けてみたら、まだ看護師さんがかたわらにいてくれた。眠らせるためだけに本を読んでくれる人が多いのに、本当にうれしかった」と言っておりました。

キリストは「用事」のためにだけ、この世に来られたものではありません。子どもを寝かしつけるやいなや去ってゆく人としてではなく、子供と共にいることを大切にされた方でした。あの方が30年の間、ナザレの人々と共に過ごされたのは、愛とは「共にいる」ことであることを教えるためでした。キリストは人と共に食し、共に泣き、共に苦勞し、共に罪を負い、共に苦しみ、共に死なれ、共に復活して下さる方なのです。マタイ福音書では初めと終わりをこの「共にいる」という言葉で囲んでいます。一緒にいてくださる事は大きな恵みなのです。